

# 東大寺大佛開眼式に元興寺から獻つた和歌の一首について

加藤 諄

難い」として「遷井々せる」の本文に「御出現になった」という解説が添えられている。<sup>註2</sup>

天平勝宝四年四月九日、盧舎那大佛の像成りて始めて開眼す、この日東大寺に行幸し、天皇親しく文武百官を率い、齋を設けて大会す、その儀一に元日に同じ——と續日本紀卷十八孝謙天皇のこの日の条は述べはじめ、つづいて華やかな盛儀の有様を記し、

——また仏法東帰より齋会の儀いまだかつてかくの如く盛なるはあらず——とも感想をつけ加えている。この東大寺盧舎那大佛開眼供養の大会に際して、元興寺から獻つた和歌三首が、東大寺要録卷二供養章の末に伝えられているが、いま、その第一首

ひみがしの山びを清み遷井々世流盧佐那佛に花たてまつるの歌について、訓み難いとされた第三句を中心として、ここに私見を述べてみたい。

この歌にはやく注意したのは、佐々木信綱博士の万葉集選訳であった。<sup>註1</sup>、そこには「三句古宮本による」と註して、第三句を「新録せる」と訓んである。

しかし武田祐吉博士の續万葉集はこれに従わず、「第三句は解し

解、第三句二字目を「井」、三字目を「二」と訓むことによって、「にはにせる——庭にせる」という新説を立てられた。

その後、これらの元興寺獻歌を引用した二三の著書はあるが、<sup>註4</sup>、いずれも第三句を、「遷井々せる」とし、依然その訓詁は未詳のまゝであった。

昭和十七年に出的木本通房氏の上代歌語詳解は、記紀万葉以外上代歌語の全般的註釈書で、これを利用する者も少なくないと思われるが、ここには板橋氏説に従って「庭にせる」と訓むのをよいとして、「そこに坐します」という釈が当てられている。

では、これらの訓釈がよところの東大寺要録そのものはどうなっているかを見ると、まず印行本についていえば、明治四十年に出た續々群書類従本は、「遷井之世流」とあって、第二字目をとくに苦心したものらしく「井」（菩薩の省合字）、第三字目を「之」としている。一体この續々類従本要録は<sup>註5</sup>、編者の言う通り、その

よった古写本の字体が読み難く、魯魚の誤り後人の書入れ算入などが多いため、全体にわたって難解の文字はまぬがれたいが、いま、この歌の第三句の文字を見るに、また難訓のよっておくところとなつたかの感がある。しかしながら昭和十九年になつて、東大寺龍松院の筒井英俊師が刻苦校訂になる『東大寺要録』が刊行された。それには、かの歌の第三句は明かに「**遷井々世流**」と見えてゐる。

以上諸家の説をくり返し仮字と訓釈とを一覧すれば、次の通りである。

- |           |       |         |
|-----------|-------|---------|
| 1. 類従本要録  | 遷井之世流 |         |
| 2. 万葉集選釈  | 新鑄せる  |         |
| 3. 續万葉集   | 遷井々世流 | 御出現になつた |
| 4. 板橋氏説   | 遷井二世流 | 庭にせる    |
| 5. 上代歌謡詳解 | 遷井二世流 | 庭にせる    |
| 6. 筒井校本要録 | 遷井々世流 | そこに坐します |
- これを訓釈について要約するならば、(一)「新鑄」説と、(二)「庭に」説の二つとすることができよう。

## 二

元興寺歌歌の見える東大寺要録卷二の古写本は、いわゆる醍醐寺本であつて、私は、この部分の写真を安藤更生氏から借りて見ることができた。それによると問題の第三句二字目は、やはり「井」のようである。三字目も疊字「々」である。これについて安藤氏に質したところ、氏も虫損のとくに多いことを注意され

て、私の見に同意された。なるほど、井の字の斜め右上より中央へかけて、筆を二度返したように見える墨痕がある。井桁の中央には白い部分はごくわずか残すに過ぎない。井にも見える。井とも思へば思えるものであつた。ところが、最近になつて醍醐寺原写本を醍醐寺について披見することができた。註、白紙を下に敷いて、その上で善子本を繰り展げていく。虫損の多い善末近く

見ると、かの井桁中央の墨痕と見たのは黒くない——虫損の形が白く透けてゐるではないか。巾 $2\text{mm}$ 、長さ $6\text{mm}$ ほどの蛆虫よりの虫穴が、左右へ等しく四八 $\text{mm}$ おきにつづいてあらわれている。なお見つめると、かの文字の縦に走る運筆は、虫損に断たれてゐるとはいえ、二線ともけつて中断されるところの筆勢ではあり得ない。井でもなければ、井でも井でもないのである。まさに「井」文字に相違ないのであつた。また「々」も第三首目の歌に、同じ形で二個所見える。全く同じだ。「二」ではない。註、次に醍醐寺本要録中に見える「井」と「井」の両字を参考にかかげよう。

(一) 醍醐寺本要録卷二元興寺歌歌第一首の「井」  
々文字、安藤更生氏撮影写真によるもの

(二) 同じく原写本影写によるもの

(三) 同じく原写本中に見える大安寺菩提傳來記の「井」文字

(四) 同じく「井」文字  
私は、この第二・三字目を「井々」と見ることによつて、いまや訓釈「庭に」説に従うことはできなくなつた。

元興寺歌の見える文獻は、要録以外あまり問題とされないようであるが、ここに私は建久御巡礼記をあげることができる。<sup>註8</sup>、この御巡礼記の東大寺の条は、すでに後藤丹治氏も述べられたように、全体に要録との交渉があり、<sup>註9</sup>、この歌の部分もまた要録から採って載せたものと見られる。

御巡礼記の写本として最も古いのは旧原文庫本といわれるが<sup>註10</sup>、いまこれによった國文東方佛教叢書本によると、第三句はやはり「瀬井々世流」とあって、右側に「にみせし」と平仮名をつけている。手許にある乾元二年(1383)寫写の前田本の複製には「瀬井々世流」とあり右側に「ニ井々セル」の片仮名が見える。その他の写本も之と同じようであることから考えれば、御巡礼記に引用したこの歌の第三句と、醍醐寺本要録の歌の第三句とは全く同じで、やはり「瀬井々世流——ニキキセル」と読む以外にはない。

ただし醍醐寺本要録は仁治三年(1241)の書写にかゝり、御巡礼記の成立が建久三年(1183)であってみれば、四十八年を遡ることであるから、御巡礼記は、醍醐寺本の祖本である要録の古写本Xから、引用したものと見なければならぬ。従って、このX本は御巡礼記成立の建久三年以前、要録序文年時の嘉承元年(1138)以後、すなわち平安末期から鎌倉初期へかけての八十六年間のうちにあるはずだ。<sup>註11</sup>、私はこのX本に「瀬井々世流」あるいは「瀬井井世流」とあったものとつよく想像している。

かくて第三句を「ニキキセル」と読んだのであるが、しかもその釈義に至っては、なお理解できたとはいえない。天平勝宝の當時から降って、X本要録に、このようにあらわれるまでには、何か伝写に際して、字形の誤りか、あるいは仮名遣の誤りがあったものと考えざるを得ないのである。

さきにあげた「新鑄」説も、恐らくこういう見解に立っての解釈であつたのであろうが、「ニキキ」に「ニヒイ」を当て、ヒ↓キ、イ↓キという仮名遣の二つの場合を越え、たちどころに仮名遣の誤りとだけ考えるのは、やゝ速きに失するかと思われる。もし、新鑄と解釈してこの一首を鑑賞するとするならば、まず一二句と三句との間に距離が目立つ。すなわち「東山の辺りが清らかなので——」新しく鑄られた」とつづくのでは不自然である。形容詞に「み」のついた奈良時代特有の形「山べを清み」を受ける句としては、その照応に一段と密接な意味のものであるべきところだ。この点から見て、「新鑄」説にも、にわかに従いかねるのである。

では、第三句「瀬井々世流」をどう訓むべきか。私は、「ニキキ↓瀬井井↓瀬比井↓ニヒキ」と見て、「新居せる」と訓みたい。

この考察における焦点の一つは、比と井の転化であるが、それがあながちに不当ではないことを、(一)音韻変化の例証をあげ、(二)字形の錯覚に起因するものとして、次に説明しよう。

(一)、又本要録の書写された当時、すなわち平安末期から鎌倉初期にかけての国語音韻は、語中語尾におけるハ行音がすでにワ行音に転化しつつあった時代で、註<sup>12</sup>、ヒ↓キの仮名遣誤りは多くの文献に見うけられるところである。次にその類例を示すことにするが、併せて要録と御巡礼記の伝写関係なども理解することにした。

1078	承暦三年	西大寺本毗盧 遮那成佛集点	蔽	ツキ。エタラム
1089	承徳三年	真福寺本将門 記	〔転 ツホヤナクキ。 從 シタカキタリ(裏書) 之ゐ(推)〕	
1099	承徳三年	近衛家承徳本 歌謡集(歌案)		
1106	嘉承元年	東大寺要録序 文年時		
1120	元永三年	三井家元永本 古今集序		
1122	保安三年	法隆寺本妙法 蓮華經玄贊点		
1136	保延二年	旧吉田神社本 法華經單字		
1165	永万五年	田中本香葉鈔		
1173	承安三年	大原三千院本 十七條憲法		
	平安末期	神田本江談抄		
	鎌倉初期	嘉慶伝承本 万葉集卷十一		
1192	建久三年	旧久原本御巡 礼記		
			新 シキ。テ 手枕	にゐ。たまくら
			選井々	にゐ。ゝ

1241	仁治三年	醍醐寺本東大 寺要録	選井々
1303	乾元二年	前田本御巡礼 記	ニキ。
	鎌倉後期	西本願寺本 万葉集卷十一	選井々
1385	文明十七年	東大寺本 東大寺要録	新 ニキ。タマクヲ 手枕
1741	寛保元年	保井本御巡礼 記	選井々
			ニキ。

このようにヒ↓キの音韻変化は、当時の時代的慣用と見ることができるのであつて、伝写の間、無意識のうちに転化することは、自然な現象であると認めなければなるまい。

(二)、比と井の両文字は、その字形が絶的に類似している。類似している上に、比と井が、前後つづいて並んでいるため、比と井の錯誤が起きることは想像に難くないであろう。一般に、古写本における本文転化の類型中、文字の無意識的变化には、視覚的錯誤と心理的变化が多いとされているが、註<sup>13</sup>、ここでは漢字の形が似ているためにおこる視覚的由因と、隣合う文字の形態に牽制され、その聯想によつておこる心理的現象と、前後両者の原因が重つて転化がおこつたものと考えられる。

例えば、法隆寺金堂釈迦像光背の銘文中に「早昇妙果の句がある。この文句を智恩院本上宮聖徳法王帝説について見ると、「早」の字は初め「昇」に牽制されてそれに似た字が書かれ、後これを墨で消してその右側に「早」と訂正されているが、この間に書写者の心理をうかがうことができる。また、日本書紀上巻第五「三宝を信敬し現報を得る縁」の終り近くにある一例をあげてみ

よう。校本畫異記(古典全集第二四頁)に、「遷世友文」(文ハ天ノ誤り)とある。この「友」は興福寺本畫異記や東大寺要録所引の文によると「无(無)」であるのに「天」に牽制されて「友」というあやしい文字となつてあらわれたものである。

比が井と混同する可能性はこれだけではない。(一)に述べた理由と重複して、すなわち、時代的音韻慣用としてのヒ↓キの転化が潜在意識となつて脳裡にあるところへ、眼前の字形的錯覚が合致したのであるから、この場合は単なる可能性以上に事実を信じたいほどの氣持である。例は註にゆずるが、古写本転写の際、かゝる例は少くないことである。註14、

とにかく「遷比井↑遷井井↑遷井」という経路を想定し得て、私は誤りないものと思う。

## 六

天平勝宝四年の原歌が、第三句「遷比井世流」と想定することにおいて、果して誤りないとするならば、これを「新居せる」と訓読することは容易であらう。新居の意味は、新しくできた大佛殿に盧舎那佛が新しく坐しますこと、註15、それを人の住むに擬して新居と詠んだのである。新しく住み給う——新居であるからこそ、第二句「山びを清み」との照応も全く自然なものとして理解できる。この照応については、万葉の歌の中から、次のような同じ場合の例歌を求めることもできる(たゞし第三五句の關係とはなるが)。

みかの原布當の野辺を清みこそ大宮處(云、こゝ)定めけらしも

(巻六一)〇五一)

新居の語は、この場合新しい造語かと思われるが、「新」の熟語は、紀に新宮・新室・新城などが見え、称徳天皇の宣命には「新城乃大宮(平城京)」とあり、万葉集にも、久邇新京、三香原新都、その他新室・新草・新肌・新手枕、または新治など多くの用例が見える。しかも新(にひ——丹日)は、いまだ語原の意味を失わない初々しいものとして、むしろ万葉時代の特色を示す語とさえ考えられる。

また一方では、「居」と熟する語の中から、万葉集の「家居」をあげるができる。すなわち、

雪を除きて梅にな戀ひそあしびきの山片附きて家居為流吾

(巻十一)一八四三)

の「家居せる」の用例を思い合せるとき、「新居」は当時の用語としてもはや疑り余地のないものであらう。註16、

また若し、仏の所行を人間の振舞に擬して、家に住むという類の修辭用法を示せとならば、遠くは、ここだくの經典に敬見する——例えば所居・住処・安住・常住あるいは葺茅爲家在・中居などの類語に思い及ぶがよからう。

降つては、興福寺南円堂建立に纏る伝説歌をとり出して、その住居・家居の例を示すこともできる。註17、

フタラキミミナミノヲカニヌミ、キセハキタノ藤ナミイカニサカエム

フタラヌシミナミノカタニイヘ、キシツイマソサカエムキタノフチナミ

以上、私は第三句を「新居せる」と訓んで、一首を次のように通釈することができた——（奈良の都の）東山のあたりが清らかなので、（そこに）新しく住み坐せる盧舎那大佛に花を献りますと。

なお、末句「花たてまつる」について一言したい。建久御巡礼記の神宮本によると、自元興寺奉和哥の下に「献<sup>マツル</sup>造花<sup>ツクリハナ</sup>副<sup>ツグ</sup>也」とあるという。註18、これによって、開眼供養の献歌三首は造花に添えて献られたことがわかる。造花のことは、要録供養章第三にも「諸家献<sup>マツル</sup>種々造花<sup>ツクリハナ</sup>」、堂裏莊嚴種々造花<sup>ツクリハナ</sup>などの句が見え、同じく供養舎那佛<sup>マツル</sup>歌辞（漢詩）には「未見珍花開<sup>マツル</sup>緑色<sup>キナンド</sup>」、白鳥香環の五言詩にも「緑花奇絶俗」とある。恐らく造花は奇にして珍なるものであったろう。さすれば、元興寺から和歌とともに献った造花も、「大安薬師元興々福寺四寺献<sup>マツル</sup>種々奇異物<sup>ツクリハナ</sup>」の奇異なるものの中の一つであったと、想像することは許されないだろうか。

とまれ、これらの莊嚴によって「その時香風地に触れて、いずくの苑に在るか」と疑い、この花の雨、空に飛んで、禪林の遠からざるを覚ゆ<sup>マツル</sup>る如き、まばゆく華やかな開眼大会に、かの歌は献られたのであった。

——註——

1、大正五年刊、四〇八頁

2、大正十五年刊、一一六頁

3、昭和七年十一月号、「東大寺盧舎那大佛開眼式に於ける元興寺献歌の一首について」

4、和讃史概説（五七頁）多屋頼俊氏著、昭和八年刊。日本佛教文学序説（二二二頁）坂口文草氏著昭和十年刊、など、

5、文明十七年書写の東大寺藏本を底本としたが、第二巻は醍醐寺本によっている。この東大寺本については、安藤更生氏「国宝本東大寺要録の書入に就いて」（『歴史と国文学』第二十六号昭和五年七月号）に詳しい。

6、京都国立博物館長神田喜一郎先生并に同館毛利久氏の御尽力と醍醐寺当局の厚情を深謝する。

7、もし「庭に」の「に」に当る仮字ならば、この場合他に適した仮字がつかわれてありそうに思われる。

8、建久二年十二月（1191）后宮の御位にあつた方が大和の諸寺を巡礼された時、僧実叡をしてその順末と諸寺の縁起などを記せしめられたもの。

9、中世国文学研究所収——「建久御巡礼記の成立と宇治拾遺物語」（一六二頁）

10、この本の最初の紹介者鈴鹿三七氏の解説により、建久三年のものでないとしてもそれより余り時代を経ないもの、卷子本一卷「南都七大寺縁起」と仮題があるという。国文佛教叢書本も、同じ題名。この系統の写本が天理図書館の保井文庫本（寛保二年書写）で、校刊美術史料第二輯として藤田経世氏の校訂底本となったもの。この他に神宮本、水戸本、前田本などがある。

11、X本は原本であり得る場合も考えられる。要録の成立は嘉承

元年とみられる。巻五別当章の元永元年（嘉承より十二年後）の所の註は要録がすでに出来ていると思われる証であろう。巻十は、安藤氏の語られた通り要録本来のものではなからう。

12、「仮名遣及仮名字体沿革史料」——大矢透博士。及び『国語と国文学』二二八号、橋本進吉博士「国語音韻変化の一傾向」（橋本進吉博士著作集第四冊所収）

13、池田亀鑑博士の古典の批判的処置に関する研究第二部（三四四頁——）「日本古典作品に於ける本文転化の諸類型とその実例」。

14、同書中に見えるものを拝借してかゝげる。（四六七頁）

さきめしときよりのちはうちはへて

よはゝるなれやいろのつねなる（貫之集——本願寺本三十六人集）

よはゝるわれ（ル）——（同本押紙）

15、要録巻一には「天平勝宝」三年建「造大佛殿」畢とあるが、又、「四年三月十四日、大佛始奉塗金、未、畢之間四月九日儲二大会二奉開眼」ともあるのである。大佛殿工事の完成は、実はさらに後のことであつた。しかし開眼大会の時大仏殿は出来ていたのであるから、新居については何等差支はない。

16、金沢庄三郎博士の「地名の研究」には、新家新居の条（一九〇頁）に、「甲斐国都留郡古郡は郡家の他に從つたからの名で、この新しい移転地を新家、新居と称し、これをニヒヤ、ニヒキ、ニヒノキ、ニヒノミ、ニヒミなどさま／＼に訓んでゐる」とある。なるほど「和名抄」には、駿河国益頭郡新居、有度郡新居、近江国浅井郡新居などを「爾比井」と訓んでいる。柳田国男氏

の「地名の研究」（九九頁）にもニヒキもしくはニヒノキを古いものとして説いてある。ニヒキ、ニヒノミについては別稿にゆづらなければならぬけれども、すでに「ニヒキ」の語音は當時の人の耳にあつたものと考えていゝようである。なお万葉集における新治（にひばり）が普通名詞としても（十二—二八五五）地名としても（九—一七五七）つかわれていることは注意に値する。

17、保延六年（一一〇〇）に大江親通が南都諸寺を巡礼して著した七佛寺巡礼私記に見えるもの、興福寺流記には前の歌の、スミキがスマキとある。また建久御巡礼記には

「補陀羅久ノ南ノ岸ニ堂タテ、北ノ藤ナミイマソサカユル」とあり、源平盛衰記などもこれを受けついでいる。

18、校刊美術史料第二輯、建久御巡礼記（一六頁）の校異による。